

意思決定における理性と感情の 段階的な心理変化プロセスに関する研究

—大学生の犯罪被害からのリスク回避行動—

村 山 誠

1. はじめに
2. 二重過程理論と感情ヒューリスティック
 - (1) 二重過程理論
 - (2) 感情ヒューリスティック
3. 大学生の犯罪被害からのリスク回避行動に関する実証調査
 - (1) 調査概要
 - (2) 調査結果
4. 二重過程理論及び感情ヒューリスティックからの分析および考察
 - (1) 元犯罪者に対するリスク回避行動
 - (2) 理性的または感情的な意思決定の違いによるリスク回避行動
5. 感情ヒューリスティックにおけるリスクとダメージのモデル
6. おわりに

1. はじめに

本研究の目的は、①人間の意思決定はリスク回避行動において段階的な心理変化（拒否反応から受容反応）を起こすのだろうか、②ベネフィットが享受しづらい、あるいは享受できない状況において、感情ヒューリスティックがリスクの情報によってどのような認識へと導かれるのだろうか、の2点を解明することである。本研究では、社会心理学や認知心理学において意思決定プロセスの主要な理論の1つとされる二重過程理論と、感情にもとづいた直感的な思考方法の感情ヒューリスティックとの概念から、過去に罪を犯した人¹⁾（以下、「元犯罪者」と呼ぶ）を拒否又は受容するといった行動に対する意思決定に影響を及ぼす要因の解明を試みることにする。

そこで、本研究では元犯罪者に対する大学生の意識調査（アンケート調査）を行い、大学生が元犯罪者に対して抱いている感情が、元犯罪者の拒否反応または受容反応といった意思決定プロセスにどのような影響を及ぼしているのかを検討していくことにする。

2. 二重過程理論と感情ヒューリスティック

(1) 二重過程理論

人間がリスクを認識・判断し、そのリスクをマネジメントしようとする場合、常に理性

に基づく認識・判断がなされるとは限らず、理性以外の要因が影響していることは様々な領域の研究²⁾において指摘されている。Chaiken and Trope (1999) は、リスクを認識・判断する当事者は状況によって、理性に基づいた認識・判断を行う能力が低くなる場合があり、そのような場合にはヒューリスティック³⁾などに基づき、直感的にすばやく回答を出す方法が用いられることを明らかにしている。このような理性と感情による人間の意思決定プロセスは二重過程理論⁴⁾と呼ばれている。

二重過程理論では、人の意思決定モードとして、無意識、直感的、感情的、そして自動的で、認知的負荷が少なく、すばやく直感的な情報処理を行うシステム1と、意識的、論理的、理性的、統制的、そして中立的であるが、認知的負荷が大きく、判断に時間と労力を要する分析的な情報処理を行うシステム2との2つのシステムがあるとされている (Evans, 2008)。土田ら (2009) によると、こうした2つのシステムは、人間の意思決定が感情に基づいた思考と理性に基づいた思考は排他的に機能するのではなく、お互いに相補的に機能していると考えるのが妥当とされる。しかし、感情に基づいた思考と理性に基づいた思考がどのようにしてお互いに相補的に機能しているのかは明らかにされていない。さらに、Alhakami and Slovic (1994) の研究によると、特定のリスクまたはベネフィットを判断する場合には感情が機能するため、当事者の感情によってリスクとベネフィットは反比例する可能性が指摘されている。すなわち、リスクやベネフィットの判断も感情により変化することが示された。これまでの感情ヒューリスティック⁵⁾に基づくリスクやベネフィットの研究はFinucane et al. (2000) やSlovic et al. (2002, 2004, 2007) などによって行われてきた。しかし、人々の感情によってはリスクに対してベネフィットを享受しにくい、あるいは享受しえない活動や事象がある。こうしたリスクに対してベネフィットを享受しにくい活動や事象に関する研究については、感情ヒューリスティックの観点からの研究は未だ十分には行われていない。

(2) 感情ヒューリスティック

意思決定において、感情が関与していることをZajonc (1980) は指摘している。また意思決定の際に、好き・嫌いといった感情が判断に影響を与えているとされる。意思決定と感情との関係についてZajonc (1980) は、感情はかなりの認知操作が行われた後のみ発生すると見なされていたが、選好・態度、印象形成や意思決定などの臨床現象に関する多くの実験結果は、感情的判断が一般的に想定されている知覚的および認知的操作とは独立しており、時間的に先行する可能性があることを示唆している。また、Zajonc (1980) によると、感情的な反応は広範な知覚的および認知的な操作なしで発生する可能性があり、認知的判断よりもより早く行われると主張した。このように、人間の好き・嫌い・喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・恐怖などの感情が意思決定に大きな影響を与えていることが明らかとなっている。

Alhakami and Slovic (1994) の研究によると、ある活動が気に入った場合、人々はそのリスクを低く判断し、ベネフィットを高く判断する傾向があり、逆に活動に否定的な場合は、リスクを高く判断し、ベネフィットを低く判断する傾向があることを指摘している。さらに、Alhakami and Slovic (1994) は感情ヒューリスティックが、リスクの情報によってベネフィットの認識へと導くことを証明している。また、Finucane et al. (2000) は、意

思決定において人々が感情ヒューリスティックを使用して判断が下されていると主張した。想像力、記憶力、類似性が確率判断の手がかりとして機能するのと同じように（たとえば、可用性ヒューリスティックや代表性ヒューリスティック）、感情は多くの重要な判断の手がかりとして機能する可能性がFinucane et al. (2000) によって示された。このように、意思決定の際にすぐに利用できる感情的な反応を用いることは、判断や決定が複雑であったり、思考に必要な認知的負荷を節約しようとする場合には、記憶から多くの関連する情報を取得したりするよりも、はるかに簡単で効率的と考えられた。

Finucane et al. (2000) の原子力発電に関する調査によれば、ベネフィットが高いという情報は、より好ましい影響を与える印象につながり、その結果としてリスクの判断も低くなる（リスクはより好ましい全体的印象から派生し、より魅力的な技術はリスクが低い）と推測される。同様に、リスクが低いという情報は、ベネフィットが高いという推論（図 2.1 の（A）、（B）部分と、表 2.1）につながるとされる。また、図 2.1 の（C）と（D）の部分に示すように、有益性が低い、あるいはリスクが高いことを示す情報によって、原子力発電に対する全体的な好感度が低下する可能性がある⁶⁾ことを示唆している。

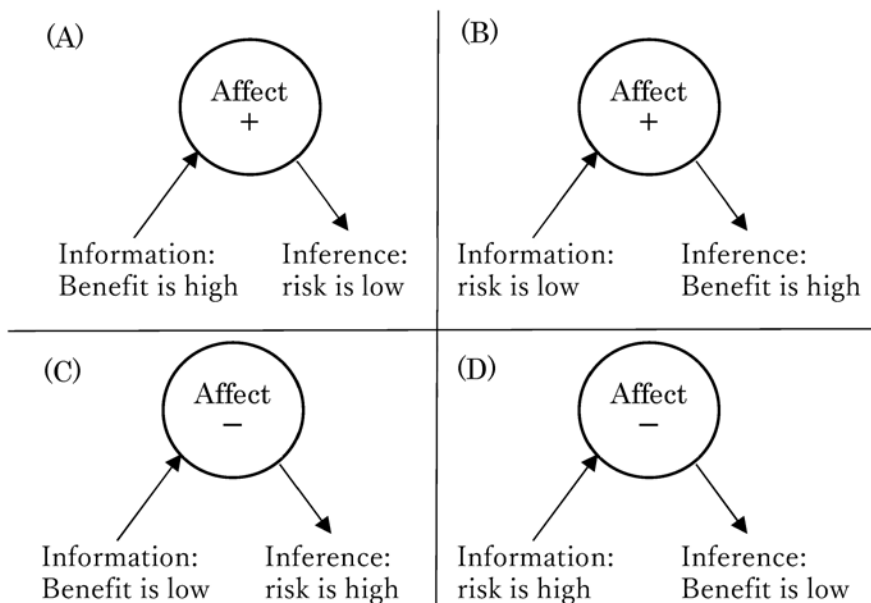


図 2.1 感情ヒューリスティックにおけるリスクとベネフィットのモデル
出所：Finucane et al. (2000)

表 2.1 リスクとベネフィットのモデルにおける入力情報と出力情報

バイアスのかかった入力情報	推測される結果
(A) 事象によるベネフィットが大きい	リスクは減少
(B) 事象によるリスクは小さい	ベネフィットは増加
(C) 事象によるベネフィットは小さい	リスクは増加
(D) 事象によるリスクが大きい	ベネフィットは減少

出所：Finucane et al. (2000) をもとに筆者にて作成

このモデル（図2.1と表2.1）は、知覚される利益が減少することによって原子力発電に対する全体的な感情的好感度が減少し、知覚されるリスクが増加することを推測するものである⁷⁾。同様に、リスク認知を高めて好感度を下げると、ベネフィットの判断が低下する⁸⁾（表2.1の2行目と3行目）と推測される。

感情ヒューリスティックは、リスクの情報によってベネフィットの認識へと導くことをFinucane et al. (2000) は証明したが、人々の感情によってはベネフィットを享受しにくい、あるいは享受しえない活動がある。こうした活動や事象について、人間はどのような認識へと導かれるのだろうか。

本研究では、こうした問題意識の下で感情ヒューリスティックがリスクの情報によって、人間の意思決定に対してどのように作用するのかを検証していくために、元犯罪者に対するリスク回避行動の実証調査を実施し、調査結果をもとに検討していくことにする。ここで、元犯罪者に対するリスク回避行動を実証調査として選択したのは、リスクの情報によってベネフィットの認識へと導くことが困難な状況を設定するためである。

3. 大学生の犯罪被害からのリスク回避行動に関する実証調査

ここでは、Finucane et al. (2000) の「リスクとベネフィットのモデル」をもとに、リスクの情報によってベネフィットの認識へと導くことが困難な状況において、リスクの情報によって人間がどのような認識へと導かれるのかを検証していく。そこで、本調査では大学生が元犯罪者に対してどのような認識を持ち、また調査対象者（以下、被験者と呼ぶ）の地域に元犯罪者が居住することに対してどの程度の拒否意識（または受容意識）を持っているのかを調査すべく、元犯罪者に対する意識調査を実施した。

この調査において、元犯罪者の居住についての意思決定行動を対象としたのは、日本国民には居住移転の自由⁹⁾があり、日本国憲法においても第22条第1項にて「何人も、公共の福祉に反しない限り、居住、移転及び職業選択の自由を有する」とされている。このように、誰がどこに居住地を選択するかについては本人の自由であり、第三者がその自由を奪うことができないことは誰もが認識している。

しかし、自分や家族などの平穏かつ安全・安心な暮らしを乱される負のリスク¹⁰⁾（以下、リスク）が生じる可能性を認識した際には、他人の居住に関して拒否したり、時には妨害行動をしたりすることがある。こうした意思決定行動は、通常時であれば理性により抑えられているが、リスクを認識した瞬間に感情的な意思決定に変化するのではないかと、また一般的に被験者は、元犯罪者に対してリスクを認識し、リスクの回避行動をとるのではないかと考え、被験者自身の居住する地域に元犯罪者が居住することに対しての拒否反応（または受容反応）について調査することにした。

(1) 調査概要

アンケート調査の実施概要は表3.1のとおり、鳥根県立大学浜田キャンパスの学生131名を対象に調査を実施した。被験者131名のうち男性69名（53.0%）、女性62名（47.0%）であり、若干男性が多い結果となったが、ほぼ同数の回答を得ることができた。また、アンケート調査後に、14名の被験者に対してヒアリング調査を追加で実施した。

本調査では、被験者131名に対して、5つの犯罪行為（殺人、暴行・傷害、窃盗・詐欺、

表 3. 1 調査概要

調査対象者	鳥根県立大学浜田キャンパスの大学生
調査期間	2021年5月11日～7月1日（約2か月間）
調査方法	質問票によるアンケート調査
アンケート回答人数	131名（男性69名、女性62名）
主な調査内容	元犯罪者に対する感情
	被験者の行動習慣
	元犯罪者に対する更生支援
	犯罪種別・距離別による拒否反応 他

薬物犯罪、性犯罪）についてアンケート調査を実施した。これは、刑法犯及び特別法犯（交通違反以外）には様々な犯罪が含まれるが、上記の5つの犯罪に限定したのは、村山（2022）と同様に被験者が容易に元犯罪者のイメージを想像することができることを考慮した結果である。

（2）調査結果

ここでは、本調査にて得られた被験者に関する情報（個人属性、元犯罪者に対する感情、行動習慣など）と元犯罪者に対する拒否反応（距離による拒否反応の違い）にわけて調査結果を示すことにする。

1）被験者に関する情報

①被験者の元犯罪者に対する感情

被験者が元犯罪者に対してどのような感情を抱いているのかを調査する目的から、元犯罪者に対する5つの感情（嫌い、許せない、関わりたくない、怖い）に対して調査した結果が表3.2である。

表3.2から、被験者は元犯罪者に対して、嫌い（65.6%）、許せない（53.4%）、関わりたくない（77.9%）、怖い（78.6%）といった感情を持っていることがわかる。特に、関わりたくない（77.9%）と怖い（78.6%）の数値が高い結果となった。これは、被験者のほとんどが直接的には犯罪被害を受けていない¹¹⁾ことから、「嫌い」や「許せない」といった直接的な感情以上に、「関わりたくない」や「怖い」といった間接的な感情が大きいことを意味する。このように、多くの被験者は元犯罪者に対してネガティブな感情を持っていることがわかる。

②生活環境の変化による意思決定行動

人間は常に同じ生活環境の中で意思決定をしているわけではなく、様々な環境変化の中で意思決定がなされている。そこで、被験者の生活環境（普段の生活と危険を察知した時、危険が迫っている時）と意思決定をするために必要な時間（考える時間）が十分にあるか否かという異なった状況における意思決定を調査した結果が表3.3である。

表3.3をみると、被験者の多くは普段の生活では「時間的な余裕あり」の場合は、時間をかけてじっくりと判断する人は76.4%¹²⁾であり、「時間的な余裕なし」の場合では、瞬時

表3.2 被験者の元犯罪者に対する感情別人数及び比率

	当てはまる	どちらでもない	当てはまらない
嫌い	86 (65.6%)	39 (29.8%)	6 (4.6%)
許せない	70 (53.4%)	58 (44.3%)	3 (2.3%)
関わりたくない	102 (77.9%)	22 (16.8%)	7 (5.3%)
怖い	103 (78.6%)	25 (19.1%)	3 (2.3%)

に判断する人は85.5%¹³⁾であった。また、危険を察知した時では、「時間的な余裕あり」の場合は、瞬時に判断する人は55.7%であり、「時間的な余裕なし」の場合では、瞬時に判断する人は93.9%であった。さらに、危機が迫っている時では、「時間的な余裕あり」の場合は、瞬時に判断する人は61.1%であり、「時間的な余裕なし」の場合では、瞬時に判断する人は91.6%であった。このように、普段の生活とは異なり、危険を察知した時と危機が迫っている時では、時間的な余裕の有無にかかわらず、瞬時に判断する傾向があることがわかる。これより、普段の生活で「時間的な余裕あり」の場合は、時間をかけて思考するといった二重過程理論でのシステム2（意識的、論理的、理性的、統制的、中立的）が機能し、「時間的な余裕なし」や「危険を察知した時」、「危機が迫っている時」ではシステム1（無意識、直感的、感情的、自動的）が機能していると考えられる。

③被験者の元犯罪者に対する理性と感情

被験者の理性と感情について調査する目的で、元犯罪者に対する更生支援についての設問を用意した。まずは、国や行政機関が元犯罪者に対してどのような更生支援をすべきなのか、あるいはすべきではないのかを問い。次に、被験者自身が元犯罪者に対してどのような更生支援ができるかを問うた。前者は被験者の理性的な意思決定を想定した設問であり、後者は被験者の感情的な意思決定を想定した設問である。それぞれの結果は表3.4と表3.5のようになった。

表3.3 被験者の生活環境別意思決定行動（人数及び比率）

	瞬時に判断	どちらかという 瞬時に判断	どちらかという 時間をかけて じっくりと判断	時間をかけて じっくりと判断
普段の生活 (時間的な余裕あり)	10 (7.6%)	21 (16.0%)	64 (48.9%)	36 (27.5%)
普段の生活 (時間的な余裕なし)	61 (46.6%)	51 (38.9%)	16 (12.2%)	3 (2.3%)
危険を察知した時 (時間的な余裕あり)	32 (24.4%)	41 (31.3%)	34 (26.0%)	24 (18.3%)
危険を察知した時 (時間的な余裕なし)	85 (64.9%)	38 (29.0%)	8 (6.1%)	0 (0.0%)
危機が迫っている時 (時間的な余裕あり)	35 (26.7%)	45 (34.4%)	29 (22.1%)	22 (16.8%)
危機が迫っている時 (時間的な余裕なし)	87 (66.4%)	33 (25.2%)	11 (8.4%)	0 (0.0%)

表3.4 国や行政機関による元犯罪者支援項目別人数及び比率

	すべき	どちらでもない	すべきではない
更生支援	103 (78.6%)	19 (14.5%)	9 (6.9%)
社会への受け入れ	84 (64.1%)	41 (31.3%)	6 (4.6%)
仕事の提供	97 (74.0%)	29 (22.1%)	5 (3.8%)
住居の提供	87 (66.4%)	37 (28.2%)	7 (5.3%)

まず、国や行政機関による元犯罪者支援（表3.4）をみると、半数以上の被験者は国や行政機関による元犯罪者に対する更生支援を支持していることがわかる。特に、更生支援と仕事の提供については70%以上の被験者が支援すべきであると答えている。これは、被験者の感情としては表3.2のようにネガティブな感情を持つてはいるものの、論理的、理性的、統制的、中立的に意思決定した結果と考えられる。したがって、多くの被験者は元犯罪者に対して更生支援をすべきであるという、論理的・理性的な思考、すなわち二重過程理論におけるシステム2が機能しているのである。

しかし、社会への受け入れおよび住居の提供について「すべき」と回答した被験者は64.1%と66.4%であり、「どちらでもない」と回答した被験者が他の項目よりも多い結果となった。これは、被験者の「元犯罪者に対する更生支援はすべき」という論理的・理性的な思考の一方で、社会への受け入れおよび住居の提供について、迷っている被験者が相対的に多いことを意味する。

次に、被験者自身による元犯罪者支援（表3.5）からわかることは、国や行政機関による元犯罪者の「更生支援をすべき」（78.6%）と比較すると、「直接支援できる」と回答した被験者（22.9%）が少ないことがわかる。被験者自身の元犯罪者支援で、「元犯罪者との交流ができる」と「一緒に仕事ができる」という2つの項目に対して肯定的な反応（54.2%と64.1%）をした被験者が否定的な反応（45.8%と35.9%）を上回ったが、これらは1人ではなく複数人であること、自身の個人情報がわからないこと、そして第三者が安全を保障していることを前提条件としていることが被験者へのヒアリングから明らかになった。このように、元犯罪者に対して直接の支援はしたくないが、せざるをえない状況やしないわけにはいかない状況などでは、消極的な支援はできるといった考えであり、積極的な肯定ではなく、消極的な肯定であることがわかる。したがって、被験者が理性と感情の狭間で意思決定に迷ったうえでの回答であることを意味しているのである。

一方、自身や家族にリスク（個人情報が知られる、直接的な被害を受けるなど）が及ぶ可能性が高いと思われる直接の支援や、近所に居住することについては、多くの被験者が否定的な（元犯罪者を拒否する）反応を示している。これより、多くの被験者は元犯罪者

表3.5 被験者自身による元犯罪者支援項目別人数及び比率

	はい	いいえ
元犯罪者へ直接支援できる	30 (22.9%)	101 (77.1%)
元犯罪者との交流ができる	71 (54.2%)	60 (45.8%)
一緒に仕事ができる	84 (64.1%)	47 (35.9%)
近所に居住することに抵抗ない	28 (21.4%)	103 (78.6%)

への更生支援はすべきであると理性的・論理的な回答をしている一方で、直接の支援についてはできない（77.1%）、近所に居住することに抵抗がある（78.6%）という自身の感情を優先した反応を示した被験者が多く、リスクの生起確率が高まると理性的な意思決定よりも感情的な意思決定が優先されていることがわかる。このように、被験者がリスクを認知した際には無意識で、直感的、感情的な二重過程理論におけるシステム1が機能しているのである。

④被験者のリスク評価

被験者の元犯罪者に対するリスクの度合いを調査した結果（表3.6）、元犯罪者へのリスク評価は高い結果となった。元犯罪者に対してリスクが高いと回答したのは58.0%（ $n=76$ ）であり、リスクが低いと回答したのは6.9%（ $n=9$ ）であった。このように、過半数以上の被験者は元犯罪者に対して、リスクが高いと回答しており、元犯罪者は被験者自身にとって生活環境を脅かす存在だと考えていることがわかる。

表3.6の通り、リスク評価が中と低い被験者数が少数である、特に低は被験者数が9人であることから、本研究では、リスク高とリスク高以外（中と低の合算）による検討をしていくことにする。

2）被験者の元犯罪者に対する拒否反応

被験者の自宅から元犯罪者が居住する場所までの距離^{14) 15)}により、被験者の元犯罪者に対する拒否反応（または、受容反応）がどのように変化するかを解明する目的で、元犯罪者に対する拒否反応を調査した結果が表3.7と表3.8である。本調査では、元犯罪者

表3.6 被験者の生活環境を脅かす元犯罪者のリスク度合別人数及び比率

	高	中	低
元犯罪者	76 (58.0%)	46 (35.1%)	9 (6.9%)

表3.7 被験者の元犯罪者に対する反応（距離別人数及び比率）

拒否度	100m	500m	1km	3km	5km	10km	20km	40km	60km	80km	100km
1	70 (53.4%)	59 (45.0%)	45 (34.4%)	32 (24.4%)	16 (12.2%)	9 (6.9%)	5 (3.8%)	4 (3.1%)	4 (3.1%)	3 (2.3%)	2 (1.5%)
2	30 (22.9%)	33 (25.2%)	34 (26.0%)	36 (27.5%)	37 (28.2%)	19 (14.5%)	14 (10.7%)	5 (3.8%)	2 (1.5%)	0 (0.0%)	1 (0.8%)
3	23 (17.6%)	23 (17.6%)	19 (14.5%)	20 (15.3%)	26 (19.8%)	32 (24.4%)	24 (18.3%)	15 (11.5%)	13 (9.9%)	12 (9.2%)	11 (8.4%)
4	1 (0.8%)	5 (3.8%)	11 (8.4%)	12 (9.2%)	12 (9.2%)	17 (13.0%)	16 (12.2%)	10 (7.6%)	7 (5.3%)	7 (5.3%)	8 (6.1%)
5	5 (3.8%)	5 (3.8%)	9 (6.9%)	8 (6.1%)	11 (8.4%)	15 (11.5%)	19 (14.5%)	27 (20.6%)	22 (16.8%)	20 (15.3%)	19 (14.5%)
6	0 (0.0%)	3 (2.3%)	4 (3.1%)	7 (5.3%)	5 (3.8%)	8 (6.1%)	13 (9.9%)	23 (17.6%)	25 (19.1%)	24 (18.3%)	16 (12.2%)
7	2 (1.5%)	3 (2.3%)	9 (6.9%)	16 (12.2%)	24 (18.3%)	31 (23.7%)	40 (30.5%)	47 (35.9%)	58 (44.3%)	65 (49.6%)	74 (56.5%)

拒否度の1から7は、1：絶対嫌、2：嫌、3：どちらかという嫌、4：どちらでもない、5：どちらかというど気にならない、6：気にならない、7：全く気にならない。

表 3.8 被験者の犯罪種別による拒否反応（距離別人数及び比率）

犯罪種別	拒否度	100m	500m	1km	3km	5km	10km	20km	40km	60km	80km	100km
殺人	1	99 (75.6%)	96 (73.3%)	84 (64.1%)	67 (51.1%)	59 (45.0%)	42 (32.1%)	28 (21.4%)	20 (15.3%)	15 (11.5%)	11 (8.4%)	11 (8.4%)
	2	16 (12.2%)	17 (13.0%)	14 (10.7%)	23 (17.6%)	24 (18.3%)	31 (23.7%)	29 (22.1%)	20 (15.3%)	11 (8.4%)	8 (6.1%)	5 (3.8%)
	3	12 (9.2%)	11 (8.4%)	18 (13.7%)	19 (14.5%)	16 (12.2%)	17 (13.0%)	22 (16.8%)	25 (19.1%)	26 (19.8%)	20 (15.3%)	17 (13.0%)
	4	1 (0.8%)	3 (2.3%)	6 (4.6%)	7 (5.3%)	9 (6.9%)	5 (3.8%)	8 (6.1%)	10 (7.6%)	11 (8.4%)	13 (9.9%)	11 (8.4%)
	5	2 (1.5%)	2 (1.5%)	4 (3.1%)	5 (3.8%)	5 (3.8%)	11 (8.4%)	7 (5.3%)	11 (8.4%)	14 (10.7%)	16 (12.2%)	21 (16.0%)
	6	1 (0.8%)	2 (1.5%)	1 (0.8%)	3 (2.3%)	8 (6.1%)	8 (6.1%)	13 (9.9%)	15 (11.5%)	19 (14.5%)	19 (14.5%)	20 (15.3%)
	7	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (3.1%)	7 (5.3%)	10 (7.6%)	17 (13.0%)	24 (18.3%)	30 (22.9%)	35 (26.7%)	44 (33.6%)	46 (35.1%)
傷害・暴行	1	78 (59.5%)	73 (55.7%)	60 (45.8%)	48 (36.6%)	36 (27.5%)	18 (13.7%)	9 (6.9%)	7 (5.3%)	6 (4.6%)	5 (3.8%)	5 (3.8%)
	2	30 (22.9%)	29 (22.1%)	31 (23.7%)	28 (21.4%)	26 (19.8%)	25 (19.1%)	24 (18.3%)	15 (11.5%)	10 (7.6%)	6 (4.6%)	5 (3.8%)
	3	13 (9.9%)	14 (10.7%)	14 (10.7%)	15 (11.5%)	22 (16.8%)	24 (18.3%)	22 (16.8%)	17 (13.0%)	12 (9.2%)	13 (9.9%)	13 (9.9%)
	4	3 (2.3%)	4 (3.1%)	6 (4.6%)	12 (9.2%)	9 (6.9%)	13 (9.9%)	12 (9.2%)	11 (8.4%)	13 (9.9%)	11 (8.4%)	12 (9.2%)
	5	6 (4.6%)	6 (4.6%)	7 (5.3%)	10 (7.6%)	12 (9.2%)	12 (9.2%)	16 (12.2%)	17 (13.0%)	15 (11.5%)	13 (9.9%)	12 (9.2%)
	6	0 (0.0%)	2 (1.5%)	3 (2.3%)	4 (3.1%)	8 (6.1%)	14 (10.7%)	15 (11.5%)	22 (16.8%)	24 (18.3%)	23 (17.6%)	18 (13.7%)
	7	1 (0.8%)	3 (2.3%)	10 (7.6%)	14 (10.7%)	18 (13.7%)	25 (19.1%)	33 (25.2%)	42 (32.1%)	51 (38.9%)	60 (45.8%)	66 (50.4%)
窃盗・詐欺	1	72 (55.0%)	66 (50.4%)	50 (38.2%)	35 (26.7%)	27 (20.6%)	15 (11.5%)	5 (3.8%)	3 (2.3%)	1 (0.8%)	1 (0.8%)	1 (0.8%)
	2	26 (19.8%)	29 (22.1%)	30 (22.9%)	29 (22.1%)	17 (13.0%)	14 (10.7%)	14 (10.7%)	7 (5.3%)	4 (3.1%)	2 (1.5%)	2 (1.5%)
	3	22 (16.8%)	20 (15.3%)	23 (17.6%)	26 (19.8%)	35 (26.7%)	32 (24.4%)	23 (17.6%)	18 (13.7%)	17 (13.0%)	15 (11.5%)	15 (11.5%)
	4	5 (3.8%)	5 (3.8%)	11 (8.4%)	14 (10.7%)	13 (9.9%)	14 (10.7%)	16 (12.2%)	17 (13.0%)	14 (10.7%)	12 (9.2%)	11 (8.4%)
	5	2 (1.5%)	5 (3.8%)	4 (3.1%)	5 (3.8%)	12 (9.2%)	16 (12.2%)	23 (17.6%)	18 (13.7%)	16 (12.2%)	19 (14.5%)	19 (14.5%)
	6	1 (0.8%)	2 (1.5%)	3 (2.3%)	5 (3.8%)	7 (5.3%)	11 (8.4%)	10 (7.6%)	21 (16.0%)	21 (16.0%)	16 (12.2%)	15 (11.5%)
	7	3 (2.3%)	4 (3.1%)	10 (7.6%)	17 (13.0%)	20 (15.3%)	29 (22.1%)	40 (30.5%)	47 (35.9%)	58 (44.3%)	66 (50.4%)	68 (51.9%)
薬物犯罪	1	81 (61.8%)	74 (56.5%)	62 (47.3%)	47 (35.9%)	35 (26.7%)	17 (13.0%)	11 (8.4%)	7 (5.3%)	5 (3.8%)	5 (3.8%)	5 (3.8%)
	2	19 (14.5%)	21 (16.0%)	28 (21.4%)	27 (20.6%)	29 (22.1%)	25 (19.1%)	19 (14.5%)	11 (8.4%)	7 (5.3%)	5 (3.8%)	5 (3.8%)
	3	20 (15.3%)	23 (17.6%)	21 (16.0%)	24 (18.3%)	23 (17.6%)	24 (18.3%)	21 (16.0%)	16 (12.2%)	15 (11.5%)	12 (9.2%)	11 (8.4%)
	4	3 (2.3%)	3 (2.3%)	6 (4.6%)	8 (6.1%)	9 (6.9%)	16 (12.2%)	19 (14.5%)	17 (13.0%)	17 (13.0%)	14 (10.7%)	14 (10.7%)
	5	3 (2.3%)	3 (2.3%)	5 (3.8%)	7 (5.3%)	6 (4.6%)	15 (11.5%)	14 (10.7%)	20 (15.3%)	17 (13.0%)	16 (12.2%)	16 (12.2%)
	6	1 (0.8%)	2 (1.5%)	3 (2.3%)	5 (3.8%)	8 (6.1%)	7 (5.3%)	10 (7.6%)	16 (12.2%)	15 (11.5%)	17 (13.0%)	14 (10.7%)
	7	4 (3.1%)	5 (3.8%)	6 (4.6%)	13 (9.9%)	21 (16.0%)	27 (20.6%)	37 (28.2%)	44 (33.6%)	55 (42.0%)	62 (47.3%)	66 (50.4%)
性犯罪	1	102 (77.9%)	100 (76.3%)	89 (67.9%)	75 (57.3%)	62 (47.3%)	48 (36.6%)	28 (21.4%)	22 (16.8%)	16 (12.2%)	15 (11.5%)	15 (11.5%)
	2	11 (8.4%)	11 (8.4%)	19 (14.5%)	19 (14.5%)	21 (16.0%)	23 (17.6%)	27 (20.6%)	16 (12.2%)	14 (10.7%)	8 (6.1%)	6 (4.6%)
	3	10 (7.6%)	9 (6.9%)	8 (6.1%)	19 (14.5%)	16 (12.2%)	15 (11.5%)	16 (12.2%)	18 (13.7%)	14 (10.7%)	13 (9.9%)	15 (11.5%)
	4	1 (0.8%)	2 (1.5%)	5 (3.8%)	3 (2.3%)	8 (6.1%)	9 (6.9%)	11 (8.4%)	9 (6.9%)	8 (6.1%)	10 (7.6%)	8 (6.1%)
	5	2 (1.5%)	2 (1.5%)	2 (1.5%)	4 (3.1%)	5 (3.8%)	8 (6.1%)	8 (6.1%)	13 (9.9%)	15 (11.5%)	17 (13.0%)	17 (13.0%)
	6	1 (0.8%)	2 (1.5%)	2 (1.5%)	1 (0.8%)	5 (3.8%)	6 (4.6%)	9 (6.9%)	10 (7.6%)	14 (10.7%)	10 (7.6%)	9 (6.9%)
	7	4 (3.1%)	5 (3.8%)	6 (4.6%)	10 (7.6%)	14 (10.7%)	22 (16.8%)	32 (24.4%)	43 (32.8%)	50 (38.2%)	58 (44.3%)	61 (46.6%)

拒否度の1から7は、1：絶対嫌、2：嫌、3：どちらかという嫌、4：どちらでもない、5：どちらかという気にならない、6：気にならない、7：全く気にならない。

全体に対する拒否反応と犯罪種別（殺人、傷害・暴行、窃盗・詐欺、薬物犯罪、性犯罪）に対する拒否反応を分けて回答を得ている。調査の際に用いた拒否反応（拒否度）の尺度は7段階であり、「1：絶対嫌」、「2：嫌」、「3：どちらかという嫌」、「4：どちらでもない」、「5：どちらかという気にならない」、「6：気にならない」、「7：全く気にならない」とし、被験者に最も近い感情を回答してもらった。

被験者の元犯罪者に対する拒否反応（表3.7）をみると、元犯罪者が被験者の居住地から離れるに従い、「絶対嫌」の数値が低下していることがわかる。特に、5kmでは「どちらでもない」から「全く気にならない」の合計が約40%であり、これらの被験者は5km離れれば自身や家族への推測される被害（ダメージ）が小さいと判断しているといえる。ここでの被験者による元犯罪者のイメージは、殺人や傷害などの凶悪的な犯罪ではなく、窃盗や詐欺などの元犯罪者を多く想定していることが、被験者へのヒアリングによりわかった。

犯罪種別ごとの拒否反応（表3.8）をみると、表3.7と同様に元犯罪者が被験者の居住地から離れるに従い、「絶対嫌」の数値が低下していることがわかる。しかし、表3.7との違いは、より拒否反応が強いことである。特に、殺人と性犯罪への拒否反応が強く、5km地点で「嫌」から「どちらかという嫌」の合算値が両方ともに約75.5%であり、3

表3.9 被験者の元犯罪者に対する拒否反応の統計情報（犯罪種別距離別）

		100m	500m	1km	3km	5km	10km	20km	40km	60km	80km	100km
元犯罪者	平均値	1.87	2.15	2.69	3.18	3.65	4.26	4.82	5.40	5.72	5.90	5.98
	中央値	1.00	2.00	2.00	2.00	3.00	4.00	5.00	6.00	6.00	6.00	7.00
	最頻値	1.00	1.00	1.00	2.00	2.00	3.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00
	標準偏差	1.21	1.44	1.82	2.03	2.06	1.99	1.94	1.71	1.63	1.51	1.50
殺人	平均値	1.45	1.52	1.90	2.26	2.61	3.10	3.60	4.11	4.54	4.95	5.12
	中央値	1.00	1.00	1.00	1.00	2.00	2.00	3.00	4.00	5.00	5.00	6.00
	最頻値	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	7.00	7.00	7.00	7.00
	標準偏差	0.91	1.03	1.46	1.71	1.96	2.14	2.23	2.20	2.11	2.02	1.96
傷害暴行	平均値	1.77	1.98	2.45	2.91	3.35	4.02	4.48	5.03	5.36	5.60	5.66
	中央値	1.00	1.00	2.00	2.00	3.00	3.00	4.00	5.00	6.00	6.00	7.00
	最頻値	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00
	標準偏差	1.16	1.43	1.85	2.02	2.12	2.11	2.07	1.98	1.88	1.79	1.79
窃盗詐欺	平均値	1.91	2.09	2.58	3.14	3.59	4.24	4.81	5.31	5.65	5.81	5.84
	中央値	1.00	1.00	2.00	3.00	3.00	4.00	5.00	6.00	6.00	7.00	7.00
	最頻値	1.00	1.00	1.00	1.00	3.00	3.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00
	標準偏差	1.31	1.48	1.79	2.00	2.04	2.05	1.91	1.75	1.61	1.55	1.55
薬物犯罪	平均値	1.88	2.03	2.28	2.84	3.33	4.00	4.48	5.05	5.37	5.60	5.65
	中央値	1.00	1.00	2.00	2.00	3.00	4.00	4.00	5.00	6.00	6.00	7.00
	最頻値	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00
	標準偏差	1.40	1.51	1.63	1.96	2.15	2.07	2.06	1.90	1.81	1.76	1.76
性犯罪	平均値	1.57	1.67	1.84	2.18	2.65	3.19	3.85	4.46	4.90	5.16	5.23
	中央値	1.00	1.00	1.00	1.00	2.00	2.00	3.00	5.00	5.00	6.00	6.00
	最頻値	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00
	標準偏差	1.32	1.46	1.56	1.78	2.05	2.26	2.32	2.32	2.23	2.16	2.15

分の2以上の被験者が拒否反応を示していることがわかる。元犯罪者全体と個別犯罪に対する拒否反応の強さは、個別の犯罪名の方が強くあらわれており、これは漠然とした「元犯罪者」というイメージよりも具体的なイメージができる情報（犯罪名）を与えることで、被験者の意思決定に影響を及ぼしていることがわかった。

さらに、被験者の元犯罪者に対する拒否反応の統計情報（表3.9）は、距離が自身の居住地から離れるに従い、元犯罪者全体および犯罪種別ごとに被験者の反応を示したものである。この表3.9では7段階評価の平均値、中央値、最頻値、標準偏差を表している。

表3.9の各平均値を見ると、被験者の居住地から100mの範囲では元犯罪者全体とすべての犯罪種別について2.00以下（絶対嫌と嫌）の値となっており、元犯罪者が100m以内に居住することを多くの被験者が拒否していることがわかる。特に、殺人を犯した元犯罪者に対しては、最も厳しく平均値が1.45であり、標準偏差についても0.91となっていることから、被験者は殺人を犯した元犯罪者に対して最も強い拒否反応を示していることがわかる。

一方で、自身の居住地から100km離れた場所¹⁶⁾では、元犯罪者全体とすべての犯罪について5.00以上の値となっており、また、中央値と最頻値の両方についても6.00（気にならない）又は7.00（全く気にならない）の数値を示していることから、多くの被験者は100km離れば被害を受けるリスクが許容範囲内になる、または被害のリスクがなくなると考えていることがわかる。さらに、元犯罪者全体とすべての犯罪について、40km離れた場所¹⁷⁾に元犯罪者が居住することに対しては、多くの被験者の拒否反応は小さくなっている。これより、40km離れた場所では、中央値は4.00以上であり、最頻値は7.00であることを見ると、元犯罪者の居住地が40km離れば、多くの被験者は元犯罪者の居住に対して気にならないことがわかる。

本研究では、拒否反応を感情的な意思決定とし、受容反応を理性的な意思決定とする。これは、前述したように、日本国民であれば「居住移転の自由」があり、元犯罪者であろうと居住地を制限することができないことから、「居住移転の自由」に反する拒否反応を感情的な意思決定と位置づけ、「居住移転の自由」を認める受容反応を理性的な意思決定と位置づけることを意味する。

4. 二重過程理論及び感情ヒューリスティックからの分析および考察

本章では、人間のリスク回避行動における意思決定問題に対して、2章で述べた問題意識に基づき元犯罪者に対するリスク回避行動、および被験者の感情的から理性的への段階的な心理変化について分析及び考察していくことにする。

(1) 元犯罪者に対するリスク回避行動

企業経営におけるリスクコントロール¹⁸⁾では、リスクを認識した場合には、リスクをどのようにコントロールし、企業業績への影響を極小化するかが問題となっている。一般的には、リスクを認識したのち、リスクを評価し、そのリスクに対して回避するのか、または低減するのか、受容するのか、移転するののかといったリスクコントロールがなされる。その際のリスク評価では、リスクの生起確率とリスクが生起した際に推測されるダメージの大きさにより行われる。リスクの生起確率が高くても、リスクによるダメージが小さければ（受容できるレベル）、リスクコントロールとしてはリスクを受容（回避や低減行動を

とらない)し、またリスクの生起確率が高く、リスクによるダメージも大きい(受容できないレベル)場合は、リスクを回避又は低減、移転といった策を講じることになる。

それでは、個人レベルでのリスクコントロールはどうだろうか。リスクコントロールの専門知識を有していない個人でも、無意識的にリスクコントロールをしている。直観的にリスクがあると認識すれば、慎重な対応をすることでリスクの生起確率を下げようとする。例えば、高額な商品を購入しようとする際には、時間をかけて慎重に購入を検討し、時には専門家の意見を参考にするなどして、購入によるリスク(問題・欠陥のある商品・物件や不適切な価格設定など)を可能な限り回避または低減させようとする。一方、安価な商品(購入に失敗してもダメージがほとんどない商品)の場合は、リスクを気にせずに衝動買いをしてしまう(リスクを受容)といったように、普段の生活の中でも、リスクの大きさによってリスクコントロールをしているのである。

ここでは、個人の元犯罪者に対するリスク回避行動がどのように取られるのかをアンケート調査の結果から検討していくことにする。

1) 意思決定における心理変化

被験者は元犯罪者が自身の居住地域に住むことに対して、どの程度の拒否反応を示すのだろうか。表4.1が被験者の拒否反応(絶対嫌、嫌、どちらかという嫌)と受容反応(どちらでもない、どちらかという気にならない、気にならない、全く気にならない)をまとめたものである。ここでの受容反応とは、積極的に元犯罪者を受け入れるという意味ではなく、受け入れに対する消極的な姿勢であり、受け入れても気にならないという意味であることを注意を要する。

表4.1の「被験者の拒否反応と受容反応」をみると、元犯罪者とすべての犯罪種別(殺人、傷害・暴行、窃盗・詐欺、薬物犯罪、性犯罪)について、被験者自身の居住地から100m以内では、90%以上の被験者が拒否反応を示しており、特に殺人については、96.9%の

表4.1 被験者の拒否・受容反応別人数(犯罪種別距離別)

種別	反応	100m	500m	1km	3km	5km	10km	20km	40km	60km	80km	100km
元犯罪者	拒否反応	123	115	98	88	79	60	43	24	19	15	14
	受容反応	8	16	33	43	52	71	88	107	112	116	117
殺人	拒否反応	127	124	116	109	99	90	79	65	52	39	33
	受容反応	4	7	15	22	32	41	52	66	79	92	98
傷害・暴行	拒否反応	121	116	105	91	84	67	55	39	28	24	23
	受容反応	10	15	26	40	47	64	76	92	103	107	108
窃盗・詐欺	拒否反応	120	115	103	90	79	61	42	28	22	18	18
	受容反応	11	16	28	41	52	70	89	103	109	113	113
薬物犯罪	拒否反応	120	118	111	98	87	66	51	34	27	22	21
	受容反応	11	13	20	33	44	65	80	97	104	109	110
性犯罪	拒否反応	123	120	116	113	99	86	71	56	44	36	36
	受容反応	8	11	15	18	32	45	60	75	87	95	95

拒否反応：1(絶対嫌)から3(どちらかという嫌)の合算値、受容反応：4(どちらでもない)から7(全く気にならない)の合算値

被験者が拒否反応を表している。一方で、被験者自身の居住地から100km離れた地点では、70%以上の被験者が受容反応を示しており、特に窃盗・詐欺については86.3%の人が受容反応を表している。

しかし、殺人と性犯罪については、100km離れた地点でも25.2%と27.5%の被験者が拒否反応を示していることから、一部の被験者は元犯罪者（殺人と性犯罪）の存在自体に拒否反応を示しており、どの程度離ればよいということではなく、元犯罪者の存在自体が許容できないという人たちが一定数いることがわかった。反対に、被験者の居住地から100m以内でも受容反応（殺人3.1%、傷害・暴行7.6%、窃盗・詐欺8.4%、薬物犯罪8.4%、性犯罪6.1%）を示している人も一定数存在していることがわかった。

このように、距離が離れても心理的な変化が生じない一部の被験者を除くと、被験者自身の居住地から徐々に離れるに従い拒否反応が小さくなり、反対に受容反応が大きくなっていることがわかる。すなわち、人は自身に対するリスクが小さくなるに従い、意思決定における心理的な変化が拒否反応から受容反応へと段階的に変わっていくのである。すなわち、被験者のリスクコントロールによりリスクを許容できる距離が決まり、推測されるダメージが大きいほど距離は長く、推測されるダメージが小さいほど距離が短くなる¹⁹⁾。

したがって、被験者は元犯罪者との距離が離れば離れるほどリスクの生起確率が低減され、リスクを許容できるようになると考える傾向があるのである。そこで、このように拒否反応（感情的な反応）から受容反応（理性的な反応）への心理的な段階的な変化を「感情から理性への段階的心理変化」（以下、「段階的心理変化」と呼ぶことにする。これは、被験者の「近所に住むことに抵抗がある」という感情的な意思決定と、「社会への受け入れをすべき」という理性的な意思決定が、距離とともに段階的に変化していくことを意味する。

2) 「拒否反応」から「受容反応」への段階的な心理変化

全ての被験者が、「拒否反応」から「受容反応」への段階的心理変化を起しているのだろうか。ここでは、そうした被験者の段階的心理変化について、より詳細に検討していくことにする。

①被験者全体

被験者の段階的心理変化の有無をまとめたのが表4.2になる。段階的心理変化のない被験者（拒否反応または受容反応のみの被験者）は犯罪種別ごとに異なり、元犯罪者では16.8%（ $n=22$ ）であり、殺人28.3%（ $n=37$ ）、傷害・暴行25.2%（ $n=33$ ）、窃盗・詐欺22.1%（ $n=29$ ）、薬物犯罪24.4%（ $n=32$ ）、性犯罪33.6%（ $n=44$ ）であった²⁰⁾。また、拒否-拒否反応のみでは、元犯罪者10.7%（ $n=14$ ）であり、殺人25.2%（ $n=33$ ）、傷害・暴行17.6%

表4.2 被験者の段階的心理変化有無の人数及び比率

	100m	100km	元犯罪者	殺人	傷害・暴行	窃盗・詐欺	薬物犯罪	性犯罪
拒否反応	拒否反応	14 (10.7%)	33 (25.2%)	23 (17.6%)	18 (13.7%)	21 (16.0%)	36 (27.5%)	
拒否反応	受容反応	109 (83.2%)	94 (71.8%)	98 (78.4%)	102 (77.9%)	99 (75.6%)	87 (66.4%)	
受容反応	受容反応	8 (6.1%)	4 (3.1%)	10 (7.6%)	11 (8.4%)	11 (8.4%)	8 (6.1%)	

($n=23$)、窃盗・詐欺13.7% ($n=18$)、薬物犯罪16.0% ($n=21$)、性犯罪27.5% ($n=36$)であった。これより、受容－受容反応のみの被験者よりも拒否－拒否反応のみの被験者の方が多いことがわかる。特に、拒否－拒否反応のみの被験者では、性犯罪による段階的心理変化を生じなかった被験者が最も多い結果となった。

また、被験者の拒否－拒否反応は犯罪種別により異なり、リスクが生じた際に推測されるダメージが大きいと思われる性犯罪や殺人ほど高い数値を示している。したがって、一律に拒否－拒否反応を示しているのではなく、被害を受けた際に推測されるダメージの大小によって反応が変わっているのである。一方、受容－受容反応は、リスクが生じた時に推測されるダメージが相対的に小さいと思われる窃盗・詐欺や薬物犯罪ほど高い数値を示している。これは、前者の犯罪に対する拒否－拒否反応では極度に犯罪被害を悲観視していることを、後者の受容－受容反応では極度に犯罪被害を楽観視していることを意味する。すなわち、被験者は犯罪種別によりリスクが生じた際のダメージの大小を推論しながらリスクコントロールをしているのである。

さらに、段階的心理変化が生じている被験者については、元犯罪者では83.2% ($n=109$)であり、殺人71.8% ($n=94$)、傷害・暴行78.4% ($n=98$)、窃盗・詐欺77.9% ($n=102$)、薬物犯罪75.6% ($n=99$)、性犯罪66.4% ($n=87$)であった。このように、被験者の66.4%から83.2%の人が、拒否反応から受容反応へと段階的な心理変化が生じていることがわかる。性犯罪を除くと、70%以上の人が段階的に心理変化している。村山（2022）によると、性犯罪については、殺人と同等あるいはそれ以上に地域住民の拒否反応が強いとされている。このことから、性犯罪に対しては厳しい目が向けられている結果として、拒否反応から受容反応へ遷移する被験者が少ないものと思われる。

次に、段階的心理変化が生じている被験者のみに限定し、距離による心理的变化を見ていくことにする。表4.3は、被験者の拒否反応と受容反応を犯罪種別・距離別に表したものである。この表をみると、すべての犯罪種別において、距離が離れるに従い拒否反応か

表4.3 被験者の拒否・受容反応別人数（犯罪種別距離別）

種別	反応	100m	500m	1km	3km	5km	10km	20km	40km	60km	80km	100km
元犯罪者	拒否反応	109	101	84	74	65	46	29	10	5	1	0
	受容反応	0	8	25	35	44	63	80	99	104	108	109
殺人	拒否反応	94	91	83	76	66	57	46	32	19	6	0
	受容反応	0	3	11	18	28	37	48	62	75	88	94
傷害・暴行	拒否反応	98	93	82	68	61	44	32	16	5	1	0
	受容反応	0	5	16	30	37	54	66	82	93	97	98
窃盗・詐欺	拒否反応	102	97	85	72	61	43	24	10	4	0	0
	受容反応	0	5	17	30	41	59	78	92	98	102	102
薬物犯罪	拒否反応	99	97	90	77	66	45	30	13	6	1	0
	受容反応	0	2	9	22	33	54	69	86	93	98	99
性犯罪	拒否反応	87	84	80	77	63	50	35	20	8	0	0
	受容反応	0	3	7	10	24	37	52	67	79	87	87

拒否反応：1（絶対嫌）から3（どちらかという嫌）の合算値、受容反応：4（どちらでもない）から7（全く気にならない）の合算値

ら受容反応へと段階的に変化していることがわかる。殺人と性犯罪では10kmから20kmの間で過半数の被験者の心理的な反応が入れ替わり、その他の犯罪では、5 kmから10kmの間で拒否反応から受容反応へと入れ替わりが生じている。また、すべての犯罪種別について、100mでは受容反応は0%であり、100kmでは拒否反応が0%になっている。このように、拒否反応と受容反応は距離が離れるに従い非対称の動きをしており、距離と共に被験者の心理的な変化が段階的に生じていることがわかる。

したがって、多くの被験者は自身のリスクコントロールによってリスクを許容できる（あるいは、リスクを認識しなくなる）レベルまで低減されると、犯罪種別によらず感情的から理性的な意思決定へと段階的心理変化が生じているのである。

②男女別のリスク回避行動

ここでは、性別によるリスク回避行動の差異について検討していくことにする。特に、拒否反応の強い殺人と性犯罪に対するリスク回避行動の男女差について検討していくことにする。表4.4は殺人と性犯罪に対する段階的心理変化の有無をまとめたものである。

表4.4の「殺人と性犯罪に対する段階的心理変化の有無」をみると、男性に比べて女性の方が殺人と性犯罪ともに拒否反応からの変化が生じない被験者が多いことがわかる。これは、相対的に力の弱い女性の方が被害者になる可能性が高く、被害を受けた際のダメージも大きいことを表している。特に性犯罪では、男性が被害者になる割合に比べて、女性が被害者になる割合が非常に高い²¹⁾ ことから、女性が性犯罪に対して強い拒否反応を表しているのである。一方で、男性の性犯罪に対する拒否反応と受容反応の変化のない被験者についてみると、常に拒否反応を示している被験者数よりも常に受容反応を示している被験者の方が多くなることがわかる。アンケート後に行った被験者からのヒアリング調査において、「男性だから性犯罪の被害者にはなることがない」「女性ではないので自分には関係ない」といった意見を男性被験者から聞くことができた。このように、性犯罪に対するリスクを過少に判断する傾向が一部の男性被験者にあることがわかった。

さらに、段階的心理変化がある被験者のみに限定してまとめた男性被験者の拒否・受容反応（表4.5）と女性被験者の拒否・受容反応（表4.6）から、男性と女性の段階的な心理変化について検討していくことにする。男性の拒否反応から受容反応へと過半数の被験者が反転する区間は、殺人が20kmから40km、性犯罪は10kmから20kmの地点であった。

一方、女性の過半数の被験者が反転する区間は、殺人と性犯罪ともに10kmから20kmの地点であった。これより、男性は女性よりも殺人に対してリスクを大きく判断する傾向があるものの、男性も女性も自身の居住地から元犯罪者の居住地が離れるに従い、同様に段階的心理変化をもたらしていることがわかる。

表4.4 殺人・性犯罪に対する段階的心理変化有無の人数及び比率（男女別）

距離別反応		Male (n=69)		Female (n=62)	
100m	100km	殺人	性犯罪	殺人	性犯罪
拒否反応	拒否反応	13 (18.8%)	11 (15.9%)	20 (32.3%)	25 (40.3%)
拒否反応	受容反応	54 (78.3%)	45 (65.2%)	40 (64.5%)	35 (56.5%)
受容反応	受容反応	2 (2.9%)	13 (18.8%)	2 (3.2%)	2 (3.2%)

表4.5 段階的心理変化のある男性被験者の拒否・受容反応別人数（犯罪種別距離別）

種別	反応	100m	500m	1km	3km	5km	10km	20km	40km	60km	80km	100km
殺人 (n=54)	拒否反応	54	52	47	42	39	32	29	18	13	5	0
	受容反応	0	2	7	12	15	22	25	36	41	49	54
性 (n=45)	拒否反応	45	45	44	43	36	26	18	11	4	0	0
	受容反応	0	0	1	2	9	19	27	34	41	45	45

拒否反応：1（絶対嫌）から3（どちらかという嫌）の合算値、受容反応：4（どちらでもない）から7（全く気にならない）の合算値

表4.6 段階的心理変化のある女性被験者の拒否・受容反応別人数（犯罪種別距離別）

種別	反応	100m	500m	1km	3km	5km	10km	20km	40km	60km	80km	100km
殺人 (n=40)	拒否反応	40	39	36	34	27	25	17	14	6	1	0
	受容反応	0	1	4	6	13	15	23	26	34	39	40
性 (n=35)	拒否反応	35	35	33	31	25	23	16	9	4	0	0
	受容反応	0	0	2	4	10	12	19	26	31	35	35

拒否反応：1（絶対嫌）から3（どちらかという嫌）の合算値、受容反応：4（どちらでもない）から7（全く気にならない）の合算値

したがって、リスク回避行動における被験者の段階的心理変化には男女による差はほとんどなく、リスクが生起することにより推測されるダメージをある程度受容できる、あるいは回避したいと考えない（または、回避する必要性を考えない）距離によって、感情から理性への段階的な心理変化が決まるといえる。すなわち、リスク回避行動における被験者の段階的心理変化は男女ともに生じているのである。

さらに、男性と女性の拒否反応に対する相関関係は、殺人の相関係数は0.9902 ($p < .001$)であり、性犯罪の相関係数は0.9939 ($p < .001$)であった。これより、男性と女性の拒否反応の変化には非常に強い相関関係があることがわかる。したがって、リスク回避行動における被験者の段階的心理変化は男女ともに生じている上に、距離に応じて同じような段階的心理変化の遷移、すなわち男女による拒否反応から受容反応への違いはほとんどないことが証明されたのである。

③段階的心理変化のない被験者の特徴

これまで、被験者の段階的心理変化について検討してきたが、被験者の中にはある一定

表4.7 段階的心理変化の有無と犯罪者に対する感情との関係（比率）

	段階的心理変化	嫌い	許せない	関わりたくない	怖い
殺人	あり：拒否-受容 (n=94)	62.8%	46.8%	75.5%	77.7%
	なし：拒否-拒否 (n=33)	78.8%	75.8%	87.9%	84.8%
	なし：受容-受容 (n=4)	25.0%	25.0%	50.0%	50.0%
性犯罪	あり：拒否-受容 (n=87)	64.4%	48.3%	77.0%	82.8%
	なし：拒否-拒否 (n=36)	75.0%	69.4%	86.1%	77.8%
	なし：受容-受容 (n=8)	37.5%	37.5%	50.0%	37.5%

数の段階的心理変化を生じない人たちがいた。ここでは、段階的心理変化を起こさなかった人たちの特徴について検討していくことにする。段階的心理変化の有無と元犯罪者に対する被験者の感情をまとめたのが表4.7である。

表4.7の「段階的心理変化の有無と元犯罪者に対する感情との関係」をみると、拒否－拒否反応の被験者では、元犯罪者に対する感情についての回答は、嫌い（殺人：78.8%、性犯罪：75.0%）、許せない（殺人：75.8%、性犯罪：69.4%）、関わりたくない（殺人：87.9%、性犯罪：86.1%）、怖い（殺人：84.8%、性犯罪：77.8%）であった。また、すべての被験者の平均値（表3.2）の、嫌い（65.6%）、許せない（53.4%）、関わりたくない（77.9%）、怖い（78.6%）と比較すると、拒否－拒否反応の被験者のほとんどの項目（性犯罪の怖いという感情を除いた）の数値が上回っていることがわかる。

一方、段階的心理変化のある被験者では、嫌い（殺人：62.8%、性犯罪：64.4%）、許せない（殺人：46.8%、性犯罪：48.3%）、関わりたくない（殺人：77.5%、性犯罪：77.0%）、怖い（殺人：77.7%、性犯罪：82.8%）であり、「怖い」を除いた数値は、拒否－拒否反応の被験者を下回った。したがって、拒否－拒否反応で段階的心理変化を伴わない被験者は、元犯罪者に対するネガティブな感情が相対的に強い傾向がある。特に、元犯罪者と関わりたくないという感情が相対的に強い傾向を示している。

受容－受容反応の被験者では、元犯罪者に対する感情で嫌い（殺人：25.0%、性犯罪：37.5%）、許せない（殺人：25.0%、性犯罪：37.5%）、関わりたくない（殺人：50.0%、性犯罪：50.0%）、怖い（殺人：50.0%、性犯罪：37.5%）であった。また、すべての被験者の平均値及び段階的心理変化のある被験者と比較すると、受容－受容反応のすべての項目の数値の方が低いことがわかる。したがって、受容－受容反応の段階的心理変化を伴わない被験者は、元犯罪者に対するネガティブな感情が相対的に弱い傾向がある。特に、元犯罪者を嫌い、許せない、怖いという感情が弱い傾向を示している。ただし、受容－受容反応の被験者は、殺人と性犯罪ともに少数であるため、被験者を増やしたさらなる追加調査が必要である。

このように、拒否－拒否反応の被験者は、元犯罪者に対するネガティブな感情が相対的に強い傾向があり、受容－受容反応の被験者は、元犯罪者に対するネガティブな感情が相対的に弱い傾向があることがわかった。さらに、元犯罪者を許せないという感情が、段階的心理変化のある被験者と拒否－拒否反応で段階的心理変化のない被験者との差が大きく²²⁾（殺人：29.0pt、性犯罪：21.1pt）、また受容－受容反応で段階的心理変化のない被験者は、嫌い、許せない、関わりたくない、怖いといった感情の数値が低いことが示唆された。

こうした感情は、実際に犯罪の被害を受けた経験（被験者のうち犯罪被害者は8.3%： $n=10$ ）からの感情ではなく²³⁾、被験者の元犯罪者に対する先入観によるところが大きい。また、危険を察知あるいは危険が迫っている際には、多くの被験者は瞬時に判断する傾向がある（表3.3）ことから、二重過程理論におけるシステム1によるヒューリスティックが優先的に機能している。したがって、多くの被験者がこれまでの人生経験の中で蓄積されてきた元犯罪者に対するバイアスが作用した結果、元犯罪者に対するリスクを過大または過少に評価しているのである。

また、企業経営におけるリスクコントロールでは、論理的かつ理性的により合理的な意思決定がなされるが、個人のリスクコントロールでは、感情が優先された非合理的な意思

決定がなされていることが明らかになった。これは、第三者に対して説明責任が生じるか否かといった要因やリスクを客観的に判断できるかといった要因などの違いではないだろうか。また、企業経営では、通常独断的な意思決定は許されず、組織内の合意形成のための説明責任が求められるが、個人活動では、独断的な意思決定が許されるためであると考えられる。

（2）理性的または感情的な意思決定の違いによるリスク回避行動

Zajonc（1980）は、意思決定において感情が関与していることを指摘している。また、Finucane et al.（2000）によると、リスクやベネフィットの判断も感情により変化することが示されている。こうした感情を手掛かりとして判断することをFinucane et al.（2000）は、感情ヒューリスティックと呼んだ。前述したようにFinucane et al.（2000）は、ある活動が気に入った場合、人々はそのリスクを低く判断し、ベネフィットを高く判断する傾向があり、逆に活動に否定的な場合は、リスクを高く判断し、ベネフィットを低く判断する傾向があることを指摘している。

しかし、2章でも述べたように、活動の種類によっては、ベネフィットを享受しにくい、あるいは享受しえない活動がある。例えば、元犯罪者の企業への受け入れや自身の所属する地域コミュニティへの受け入れなどである。当然、前述のような元犯罪者の受け入れでは、ベネフィットが全くないわけではなく、企業への受け入れであれば労働力として、また地域コミュニティへの受け入れであれば地域活動への貢献などが考えられるが、一般的にはネガティブな感情の方が大きく作用する。これは、本研究の調査結果（例えば、元犯罪者と関わりたくないと回答した被験者は77.9%など）でも明らかである。そこで、こうした問題意識の下で感情ヒューリスティックが、リスクの情報によって、理性的または感情的な意思決定によるリスク回避行動へどのような影響をもたらすのかについて検討していくことにする。

ただし、ここでの理性的とはアンケート項目の国や行政機関による「更生支援」と「社会への受け入れ支援」の両方が肯定の場合とし、感情的とはどちらか一方または両方を否定した場合として位置付けている。これは、元犯罪者の社会復帰は人権問題であり、元犯罪者の当然の権利でもあるため、国や行政機関による「更生支援」と「社会への受け入れ支援」は、すべきことと考えるのが一般的と考えるからである。

1）被験者全体の意思決定とリスク評価の関係

被験者の理性的・感情的別のリスク評価をまとめたのが表4.8になる。理性的な意思決定をする被験者は61.1%（ $n=80$ ）であり、男性と女性は同数（ $n=40$ ）であった。一方、感情的な意思決定をする被験者は38.9%（ $n=51$ ）であり、男性は43.1%（ $n=22$ ）、女性は56.9%（ $n=29$ ）であった。これより、感情的に意思決定する被験者に比べて、理性的な意思決定をする被験者が多いことがわかる。

また、リスクが高いと評価した被験者は、理性的な被験者は55.0%（ $n=44$ ）、感情的な被験者は62.7%（ $n=32$ ）であり、感情的な被験者の方が理性的な被験者に比べてリスクを高く評価する傾向があることがわかる。さらに、男女別でのリスク評価をみていくと、理性的では女性よりも男性のリスク評価は高く、感情的では男性よりも女性のリスク評価が高

表 4. 8 被験者の意思決定行動とリスク評価 (被験者数と比率)

	Sex	リスク (高)	リスク (中)	リスク (低)
全体 (n=131)	男性 (n=69)	46 (66.7%)	18 (26.1%)	5 (7.2%)
	女性 (n=62)	30 (48.4%)	28 (45.2%)	4 (6.5%)
理性的 (n=80)	男性 (n=40)	26 (65.0%)	10 (25.0%)	4 (1.0%)
	女性 (n=40)	18 (45.0%)	19 (47.5%)	3 (7.5%)
感情的 (n=51)	男性 (n=22)	12 (54.5%)	9 (40.9%)	1 (4.5%)
	女性 (n=29)	20 (70.0%)	8 (27.6%)	1 (3.4%)

表 4. 9 過半数の被験者が拒否反応を示さなくなる距離 (リスク評価別)

リスク評価	元犯罪者	殺人	傷害・暴行	窃盗・詐欺	薬物犯罪	性犯罪
			距離 (拒否反応比率)			
高 (n=76)	20km (36.8%)	60km (46.1%)	20km (48.7%)	20km (34.2%)	20km (44.7%)	40km (42.1%)
高以外 (n=55)	5km (47.3%)	40km (41.8%)	10km (45.5%)	10km (40.0%)	10km (36.4%)	40km (43.6%)

い結果が得られた。これは、男性に比べて女性の方が相対的に感情的な意思決定では、リスクを高く評価する傾向があることを示している。

表 4. 9 は、被験者の過半数が元犯罪者に対して拒否反応を示さなくなる距離をリスク評価別に表している。この表を見ると、リスク評価が高いと拒否反応を示さなくなる距離がリスク評価高以外よりも相対的に長くなっていることがわかる。これより、リスク評価が高いほどリスクの生起確率を高く、ダメージも大きく推測した結果、リスクを受容できるまでの距離が長くなったのである。一方、リスク評価が低いほどリスクの生起確率も低く、ダメージも小さく推測した結果、リスクを受容できるまでの距離も短くなっている。すなわち、リスクを受容できるまでの距離が長い場合は推測されるダメージを大きく推測し、距離が短い場合は推測されるダメージを小さく推測しているのである。

2) 理性的・感情的な意思決定とリスク評価の関係

ここでは、理性的な意思決定をする被験者と、感情的に意思決定をする被験者について検討していくことにする。理性的な被験者のリスク評価をまとめたのが表 4. 10であり、感情的な被験者のリスク評価をまとめたのが表 4. 11である。被験者の過半数が拒否反応から受容反応へと遷移する距離は、犯罪種別により異なることは (1) ですすでに述べているが、ここでは、リスク評価の違いに注目してみていくことにする。

まず理性的な意思決定では、リスク評価が高 (n=44) の被験者は、犯罪種別にもよるが高以外 (中と低: n=36) と比較すると全体的に拒否反応から受容反応へと反転する距離が長くなる傾向がある。これは、リスク評価が高いと、リスクが生じた際に推測されるダメージが大きくなると考え、リスクを許容範囲のレベルまでに下げるには距離が長くなる傾向があることを意味している。しかし、一部の犯罪種別 (元犯罪者、窃盗・詐欺と性犯罪) については、リスク評価の違いによる距離の差はなく、リスク評価によらずリスクの

表4. 10 過半数の被験者（理性的）が拒否反応を示さなくなる距離（リスク評価別）

リスク評価	元犯罪者	殺人	傷害・暴行	窃盗・詐欺	薬物犯罪	性犯罪
距離（拒否反応比率）						
高（ <i>n</i> = 44）	10km (48.6%)	60km (40.5%)	20km (37.8%)	10km (45.9%)	20km (40.5%)	40km (37.8%)
高以外（ <i>n</i> = 36）	10km (36.1%)	40km (44.4%)	10km (47.2%)	10km (47.2%)	10km (38.9%)	40km (47.2%)

生起確率や推測されるダメージの大きさに違いがないと判断していると考えられる。また、リスク評価が高と高以外では、距離の差分が最大20km（殺人）であり、最小0km（元犯罪者、窃盗・詐欺と性犯罪）であった。さらに、リスク評価が高と高以外の平均的な距離の差分は6.67kmであった。このように、理性的な意思決定においては、リスク評価による距離の違いは小さいことがわかる。したがって、理性的な意思決定においては、拒否反応から受容反応へと反転する距離に対して、リスク評価の高低による影響を受けることが小さいといえるのである。

次に感情的な意思決定では、リスク評価が高と高以外では、距離の差分が最大60km（殺人）であり、最小15km（元犯罪者、窃盗・詐欺と薬物犯罪）であった。さらに、リスク評価が高と高以外の平均的な距離の差分は25.83kmであった。このように、理性的な意思決定と同様にリスク評価が高（*n* = 32）の被験者は、高以外（中と低：*n* = 19）と比較するとすべての犯罪種別に対して拒否反応から受容反応へ反転する距離が長くなる傾向がある。また、理性的な被験者よりもリスク評価間（高と高以外）の距離の差が大きくなっている。これは、感情的な意思決定において、リスク評価が高い場合では、リスクが生じた際に推測されるダメージが大きくなると考える傾向があり、リスク評価が高くない場合では、リスクが生じた際に推測されるダメージを小さく考える傾向があることを意味している。すなわち、感情的な意思決定者の行動として、リスク評価の違いは、リスクが生じた際に推測されるダメージにも大きく影響することが示されたのである。

さらに、拒否反応を示さなくなる距離について理性的な被験者と比較すると、リスク評価が高の場合では、感情的な被験者の方が距離は平均10km²⁴⁾ 長く、リスク評価が高以外の場合では、感情的な被験者の方が距離は平均9.16km²⁵⁾ 短くなっている。これは、感情がリスク評価に大きな影響を受け、推測されるダメージに大きく影響を与えていることを意味する。したがって、感情的な意思決定においては、拒否反応から受容反応へと反転する距離は、リスク評価の高低による影響を大きく受けているといえるのである。

表4. 11 過半数の被験者（感情的）が拒否反応を示さなくなる距離（リスク評価別）

リスク評価	元犯罪者	殺人	傷害・暴行	窃盗・詐欺	薬物犯罪	性犯罪
距離（拒否反応比率）						
高（ <i>n</i> = 32）	20km (38.5%)	80km (38.5%)	40km (41.0%)	20km (38.5%)	20km (48.7%)	40km (46.2%)
高以外（ <i>n</i> = 19）	5km (36.8%)	20km (47.4%)	10km (42.1%)	5km (42.1%)	5km (42.1%)	20km (42.1%)

3) 理性的・感情的な意思決定におけるリスク評価と推測されるダメージの関係

以上のことから、理性的な意思決定者よりも、感情的な意思決定者の方が、リスクが生じた際に推測されるダメージの大小の差が相対的に大きいことが示された。すなわち、感情とリスク評価によって、推測されるダメージがプラス方向またはマイナス方向へ相乗的に作用しているといえるのである。

これまでの議論を整理すると、表4. 12のようになる。理性的でリスク評価が高の場合は、推測されるダメージが大きくなり、リスク評価が高以外では推測されるダメージが小さくなる。また、感情的でリスク評価が高の場合は、推測されるダメージが大きくなり、リスク評価が高以外では推測されるダメージが小さくなる。このように、理性的も感情的もリスク評価によって同じような動きをすることがわかった。しかし、このような関係は一般的に考えられている現象であり、想定内のことを検証したに過ぎない。

本研究により新たに明らかになったことは、理性的な被験者のリスク評価が高よりも、感情的な被験者のリスク評価の高の方が推測されるダメージは大きく、また理性的な被験者のリスク評価が高以外よりも、感情的な被験者のリスク評価の高以外の方が推測されるダメージは小さいということである。すなわち、感情的な被験者の推測されるダメージの範囲内に理性的な被験者の推測されるダメージが収まっているということである（図4. 1）。

これより、感情的な意思決定では、理性的な意思決定に比べて常に過大にダメージを推測するのではなく、リスクが高いと評価した場合は理性的な意思決定よりも過大にダメージを推測し、逆にリスクが高くないと評価（高以外）した場合には理性的な意思決定よりも過小にダメージを推測していることがわかった。したがって、理性的な意思決定をする人は、感情的に意思決定をする人よりも論理的・中立的な意思決定をしているのである。

表4. 12 理性的・感情的によるリスク評価と推測ダメージの関係

	リスク評価	推測されるダメージ
理性的	高	ダメージは大きい (<感情的)
	高以外 (中・低)	ダメージは小さい (>感情的)
感情的	高	ダメージは大きい (>理性的)
	高以外 (中・低)	ダメージは小さい (<理性的)

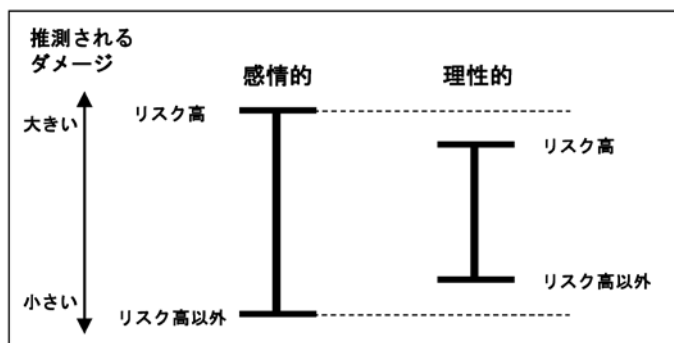


図4. 1 理性的・感情的による推測ダメージの関係

5. 感情ヒューリスティックにおけるリスクとダメージのモデル

一般的な元犯罪者に対するイメージは、決して良いものではなく、「怖い」「恐ろしい」「近づきたくない」「関わりたくない」といったネガティブなものである²⁶⁾。村山（2022）の調査結果においても、被験者の99.9%（ $n=102$ ）は、元犯罪者に対して嫌悪感を持っていることが明らかになっている。また、内閣府の「平成30年度 再犯防止に関する世論調査²⁷⁾」（ $n=1,666$ ）でも、犯罪をした人の立ち直りに協力したいという設問に対して「どちらかといえば思わない」、「思わない」と答えた人は46.5%であり、協力したいと思わない理由については、「犯罪をした人と、どのように接すればよいかわからないから」（44.9%）、「自分や家族の身に何か起きないか不安だから」（43.0%）、「犯罪をした人と、かかわりを持ちたくないから」（35.5%）などとなっている。一方で、「犯罪をした人に直接会って継続的に助言や援助をする」と回答した人はわずか13.1%であった。このように、一般的には元犯罪者に対するイメージは決して良いものではないことがわかる。

こうした元犯罪者に対するネガティブな感情を持っていることが一般的である状況において、Finucane et al.（2000）の調査結果が示すように感情ヒューリスティックは、リスクの情報によってベネフィットへの認識へと導くことは難しいといえる。前章では、元犯罪者に対する被験者の意思決定行動として、感情ヒューリスティックはリスクの情報によって推測されるダメージの認識へと導くことを明らかにした。したがって、人々の感情によってはベネフィットを享受しにくい、あるいは享受しえない元犯罪者の受容行動といった活動に対して、自身あるいは家族が被害者となった際に推測されるダメージへの認識へと導くのである。

このように、特定のリスクまたは推測されるダメージを判断する場合には感情が機能するため、人々の感情によってリスクの評価と推測されるダメージは比例するといえる。すなわち、リスクの評価や推測されるダメージの判断も感情によって変化することが本研究により示された。具体的には、元犯罪者の受容行動に肯定的な場合、人々はそのリスクを低く判断し、ダメージも小さく推測する傾向があり、逆に受容行動に否定的な場合は、リスクを高く判断し、ダメージも大きく推測する傾向がある。また、元犯罪者の受容行動に肯定的な場合、理性的な意思決定と比べて感情的な意思決定では、相対的にリスクを低く判断し、ダメージも小さく推測する傾向があり、反対に受容行動に否定的な場合は、理性的な意思決定と比べて感情的な意思決定では、相対的にリスクをより高く判断し、ダメージも大きく推測する傾向がある。

これより、Finucane et al.（2000）によって示された「感情ヒューリスティックにおけるリスクとベネフィットのモデル」に対して、本研究では「感情ヒューリスティックにおけるリスクとダメージのモデル」（図5.1、表5.1）を提示することにする。このモデルでは、元犯罪者に対する拒否反応を引き起こす感情ヒューリスティックが機能することで、元犯罪者が被験者の地域に居住することに対して、リスクが高いという情報（バイアスのかかった情報）を入力とし、起こりうるダメージが大きいと推測をしているか（図5.1の（A）と（C））、あるいは居住によるリスクが低いという情報を入力とし、起こりうるダメージが小さいと推測している（図5.1の（B）と（D））。

すなわち、被験者が有している元犯罪者は危険な存在という感情（バイアスにより操作

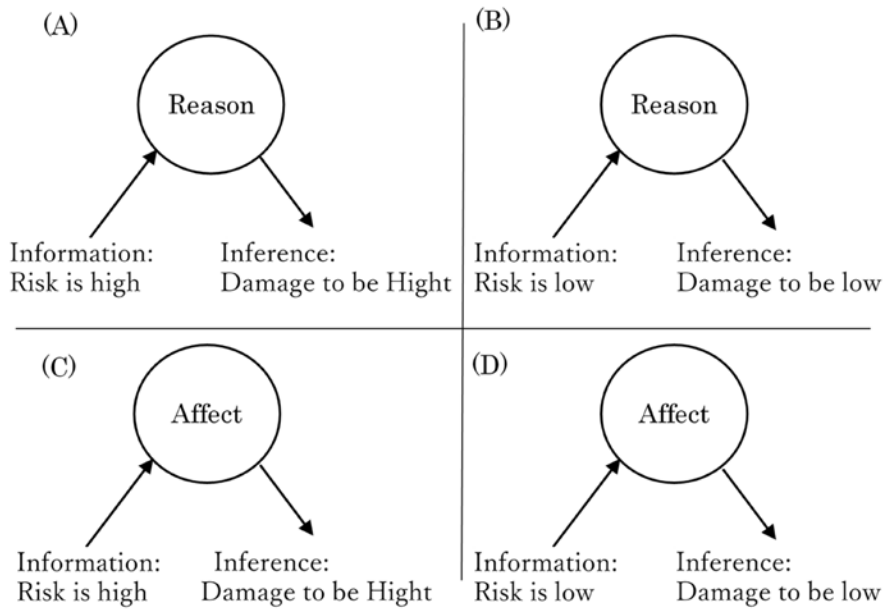


図 5.1 感情ヒューリスティックにおけるリスクとダメージのモデル
出所：Finucane et al. (2000) をもとに筆者にて作成

表 5.1 リスクとダメージのモデルにおける入力情報と出力情報

バイアスのかかった入力情報	推測される結果
(A) 事象によるリスクが大きい	被害によるダメージが大きい (<C)
(B) 事象によるリスクは小さい	被害によるダメージが小さい (>D)
(C) 事象によるリスクが大きい	被害によるダメージが大きい (>A)
(D) 事象によるリスクは小さい	被害によるダメージが小さい (<B)

された感情)により、元犯罪者が居住することによるリスクを過大評価し、推測されるダメージも過大に推測した結果、強い拒否反応という判断に至り、反対に元犯罪者はあまり危険な存在ではないという感情により、元犯罪者が居住することによるリスクを過少評価し、推測されるダメージも過少に推測した結果、弱い拒否反応という判断に至ったと考えられる。

さらに、このモデル(図5.1と表5.1)の特徴は、リスクが大きいと判断した際に、理性的な意思決定(A)に比べて、感情的な意思決定(C)の方がダメージを大きく推測し、反対にリスクが小さいと判断した際に、理性的な意思決定(B)に比べて、感情的な意思決定(D)の方がダメージを小さく推測することである。

6. おわりに

本研究では、二重過程理論と感情ヒューリスティックの観点から、元犯罪者を拒否又は受容するといった行動に対する意思決定に影響を及ぼす要因の解明を試みることを目的に、大学生の犯罪被害からのリスク回避行動に関する実証研究を行った。その結果、①人間の

意思決定はリスク回避行動において段階的な心理変化（拒否反応から受容反応）を起こすのだろうか、②ベネフィットが享受しづらい、あるいは享受できない状況において、感情ヒューリスティックがリスクの情報によってどのような認識へと導かれるのだろうか、の2点について明らかにすることができた。さらに、元犯罪者に対する拒否反応を引き起こす感情ヒューリスティックの観点から、従来のFinucane et al. (2000) による「リスクとベネフィットモデル」に対して、新たにリスクとダメージの関係性から「感情ヒューリスティックにおけるリスクとダメージのモデル」を提示した。これにより、感情的な意思決定と理性的な意思決定における認知されたリスクの評価と推測されるダメージとの関係性を示唆することができた。

また、企業経営におけるリスクコントロールでは、論理的・理性的な意思決定により合理的な判断がなされるはずであるが、個人のリスク回避行動では、感情が優先して非合理的な判断がなされている傾向が強いことを明らかにした。これにより、リスクコントロールの観点から、直観的・感情的な意思決定と論理的・理性的な意思決定との間では、認識されるリスクの高低が被験者の許容範囲内か否かにより段階的心理変化が起こることを示唆することができた。

しかし、本研究では次のような問題や課題が残っている。本研究の被験者は鳥根県内の大学生に限定されているため、その範囲内での考察結果となっている。本研究の考察を幅広い世代に適用するためには、被験者を増やしたさらなる調査が必要である。また、本件研究では元犯罪者に対して相対的に拒否反応が弱い被験者の特徴として、元犯罪者に対する「嫌い、許せない、関わりたくない、怖い」といった感情の数値が低いことを、また相対的に拒否反応が強い被験者の特徴として、元犯罪者に対する「嫌い、許せない、関わりたくない、怖い」といった感情の数値が高いことを明らかにした。このような項目の数値が低い人間を増やすことにより、社会が元犯罪者を受け入れやすい環境になる可能性が高まる。しかし、どのようにして元犯罪者に対する拒否反応が弱い人間を増やすかといった課題が残された。この残された課題については、今後の研究課題としたい。

注

- 1) 本研究における「元犯罪者」は、警察行政機関により検挙され、司法機関にて有罪判決を受けた人（執行猶予を含む）を対象としており、過去に罪を犯し社会復帰した人も含めている。
- 2) 心理学分野に加えて、経済学（行動経済学）分野や経営学（モチベーションや意思決定論）分野など。
- 3) ヒューリスティックとは、問題を解決したり、不確実な事象に対して判断を下したりする際に、判断するための明確な手掛かりがない場合に、過去の経験や常識などを用いる便宜的な方法である。
- 4) 二重過程理論とは、リスクを判断・認識する当事者は状況によって理性にもとづいた認識・判断を行う能力が低くなる場合、そのような場合には理性に基づく認識や判断がなされずヒューリスティックなどに基づいた判断すべき材料を単純化し、直感的にすばやく回答を出す判断方法（Chaiken and Trope, 1999）。
- 5) 感情ヒューリスティックとは、感情から導き出された判断に適合するような情報を求める。このことから、被験者が元犯罪者に対してネガティブな（好ましくない）感情を持っている場合は、元犯罪者に対するネガティブな情報のみを収集することになる。したがって、被験者は元犯罪者に対するネ

ガティブな感情を増幅させることになる。

- 6) Finucane, M. L., Alhakami, A., Slovic, P., and Johnson, S. M. (2000). The Affect Heuristic in Judgements of Risks and Benefit. *Journal of Behavioral Decision Making*, 13, pp.9-10.
- 7) *Ibit*, pp.9-10.
- 8) *Ibit*, pp.9-10.
- 9) 居住移転の自由は、自己の欲する所に住所または居所を定め、移転し、自己の意思に反して居住地を移されることのない自由のことである。
- 10) 研究分野によっては、正のリスク（プラスのリスク）と負のリスク（マイナスのリスク）がある。正のリスクはベネフィットの増大であり、負のリスクはダメージの増大である。
- 11) 被験者131名中で、犯罪の被害経験者は10名（7.6%）であった。
- 12) 比率の数値は、時間をかけてじっくりと判断すると、どちらかという時間をかけてじっくりと判断するの合算値である。
- 13) 比率の数値は、「瞬時に判断する」と「どちらかという瞬時に判断する」の合算値である。
- 14) アンケートでは100mから100km（100m、500m、1 km、3 km、5 km、10km、20km、40km、60km、80km、100km）までの11段階で拒否反応を調査した。
- 15) 距離による被験者の拒否反応を調査する際に、被験者には浜田市を中心とした地図と距離間をイメージしやすい資料（100mの例として、浜田キャンパスの中心地から大学のバスロータリーといった）を参考として、すべての被験者が同じ尺度で距離感を判断できるようにした。
- 16) 例えば、浜田市から松江市までの距離が約108km。
- 17) 例えば、浜田市から広島県北広島町までの距離が約36.2km。
- 18) 企業におけるリスクは、人事（採用・雇用）活動、生産・販売活動、税務活動、情報管理などの活動において生じる。リスクコントロールはリスクマネジメントの構成要素の1つであり、リスクマネジメントには、リスクの識別、リスクの分析、リスクへの対応、残存リスク等の監視といった4つのプロセスがある。また、リスクコントロールは上記のリスクへの対応に相当し、リスクへの対応には回避、軽減、移転、受容の4つの対応がある。
- 19) リスク評価が高であっても、推定されるダメージが許容範囲内であればリスクを受容する行動、すなわち受容する行動をとり、リスク評価が高以外であっても、推定されるダメージが許容範囲内外であればリスクを回避する行動、すなわち拒否する行動をとる。
- 20) 拒否－拒否反応と受容－受容反応のそれぞれの合算値である。
- 21) 法務総合研究所（2016）「性犯罪に関する総合的研究」『研究部報告55』、12頁-13頁。 https://www.moj.go.jp/housouken/housouken03_00084.html（2022. 8. 2最終アクセス）
- 22) 4つの感情の平均値は、殺人が16.13%であり、性犯罪は11.45%であった。許せないを除いた最大の差分は、殺人が嫌い（16.0%）であり、性犯罪は（10.6%）であった。
- 23) 被験者131名中犯罪被害者経験者は10名であり、10名の犯罪被害者の拒否－拒否反応は性被害11.1%（4名／36名）、殺人6.1%（2名／33名）であった。
- 24) 全ての犯罪種別（元犯罪者、殺人、傷害・暴行、窃盗・詐欺、薬物犯罪、性犯罪）について、リスク評価が高の理性的な被験者と感情的な被験者との距離の差分の平均値である。特に、殺人と傷害・暴行の差分が20kmと最大であり、薬物犯罪と性犯罪の差分が0 kmで最小であった。
- 25) 全ての犯罪種別（元犯罪者、殺人、傷害・暴行、窃盗・詐欺、薬物犯罪、性犯罪）について、リスク評価が高以外（中と低）の理性的な被験者と感情的な被験者との距離の差分の平均値である。特

に、殺人と性犯罪の差分が20kmと最大であり、傷害・暴行の差分が0 kmで最小であった。

- 26) 村山（2022）「犯罪者に対する住民の受容・排除行動における意思決定プロセスに及ぼす要因」『鳥根県立大学 総合政策論叢』第44号， 1頁-24頁。
- 27) 内閣府「平成30年度 再犯防止に関する世論調査」. https://survey.gov-online.go.jp/h30/h30-saihan/3_chosahyo.html（2022. 8. 5最終アクセス）

参考文献

- 内閣府「平成30年度 再犯防止に関する世論調査」. <https://survey.gov-online.go.jp/h30/h30-saihan/index.html>（2022. 8. 5最終アクセス）
- 法務総合研究所（2016）「性犯罪に関する総合的研究」『研究部報告55』， 1頁-178頁. https://www.moj.go.jp/housouken/housouken03_00084.html（2022. 8. 2最終アクセス）
- 土田昭司，木下富雄，中谷内一也，田中豊他（2009）「リスク認知・リスク判断は感情か理性か：リスクコミュニケーションにおける訴求効果」『日本リスク研究学会誌』第19巻第2号， 44頁-55頁。
- 村山誠（2022）「犯罪者に対する住民の受容・排除行動における意思決定プロセスに及ぼす要因」『鳥根県立大学 総合政策論叢』第44号， 1頁-24頁。
- Alhakami, A. S., and Slovic, P. (1994). A psychological study of the inverse relationship between perceived risk and perceived benefit, *Risk Analysis* 14 (6), pp.1085-1096.
- Chaiken, S., and Trope, Y. (1999). *Dual-process theories in social psychology*, New York: Guilford Press.
- Evans, J. St. B. T. (2008). Dual-processing accounts of reasoning, judgment, and social cognition, *Annual Review of Psychology* 59, pp.255-278.
- Finucane, M. L., Alhakami, A., Slovic, P., and Johnson, S. M. (2000). The Affect Heuristic in Judgements of Risks and Benefit, *Journal of Behavioral Decision Making*, 13, pp.1-17.
- Kahneman, D., and Tversky, A. (1979). Prospect theory: An analysis of decision under risk, *Econometrica* 47, pp.263-291.
- Kahneman, D., Slovic, P., and Tversky, A. (1982). *Heuristics and biases: Judgment under Uncertainty*, Cambridge: University Press.
- Kahneman, D., and Frederick, S. (2002). Representativeness revisited: Attributive substitution in intuitive judgment. In Gilovich, T., Griffin, D., and Kahneman, D., (Eds.), *Heuristics and biases: The psychology of intuitive judgment* (pp.49-81), Cambridge: University Press.
- Slovic, P., Finucane, M. L., Peters, E., and MacGregor, D. G. (2002). Rational actors or Rational fools: implications of the affect heuristic for behavioral economics, *Journal of Socio-Economics* 31, pp.329-342.
- Slovic, P., Finucane, M. L., Peters, E., and MacGregor, D. G. (2004). Risk as analysis and risk as feelings: Some thoughts about affect, reason, risk, and rationality, *Risk Analysis* 24, pp.311-322.
- Slovic, P., Finucane, M. L., Peters, E., and MacGregor, D. G. (2007). The Affect Heuristic, *European Journal of Operational Research* 177, pp.1333-1352.
- Tversky, A., and Daniel, K. (1974). Judgement under Uncertainty: Heuristics and Biases, *Science, New Series* 185, No.4157, pp.1124-1131.
- Tversky, A., and Daniel, K. (1986). Rational Choice and the Framing of Decisions, *Journal of Business* 59, pp.S251-S278.

Zajonc, R. B. (1980). Feeling and Thinking: Preferences Need No Inferences, *American Psychologist*, vol.35, pp.151-175.

キーワード：意思決定行動、二重過程理論、感情ヒューリスティック、リスクコントロール、段階的心理変化

(MURAYAMA Makoto)

A Study on the Graded Psychological Shift Process of Reason and Affect in Decision Making

—Risk Aversion Behavior of University Students from
Criminal Victimization—

MURAYAMA Makoto

Summary

In this study, we will attempt to elucidate the factors that influence behavioral decision-making, such as rejecting or accepting offenders, from the perspective of dual process theory, one of the major theories of decision-making processes in social and cognitive psychology, and the affect heuristic, an intuitive way of thinking based on emotions. We will attempt to elucidate the factors that influence behavioral decision-making, such as rejecting or accepting offenders. The purpose of this study is to elucidate (1) whether human decision-making undergoes a gradual psychological shift (from affect to reason) in risk-averse behavior, and (2) how the affect heuristic is guided by information about risk in situations where benefits are difficult or impossible to enjoy. This research is intended to elucidate these two points. To this end, this study conducted a survey of college students' attitudes toward offenders (questionnaire survey) and examined how the feelings college students have toward offenders influence their decision-making processes, such as their rejection or acceptance reactions.

As a result, we were able to clarify the two points (1) and (2) above. Furthermore, from the perspective of the affect heuristic that causes rejection reactions toward offenders, we proposed a new “model of risk and damage in the affect heuristic” based on the relationship between risk and damage, in contrast to the conventional “risk-benefit model” by Finucane et al. (2000) proposed. This allowed us to suggest a relationship between the evaluation of perceived risk and inferred damage in affective and rational decision making.

In addition, the study revealed that in risk control in corporate management, rational decisions should be made through logical and rational decision making, but in individual risk aversion behavior, there is a high tendency for irrational decisions to be made as emotions take precedence. This suggests that, from the perspective of risk control, the Graded Psychological Shift occurs between intuitive/emotional decision making and logical/rational decision making, depending on whether the perceived risk is within the subject's acceptable range or not.

Keywords: Decision-making behavior, Dual process theory, Affect Heuristic, Risk control, Graded Psychological Shift